

☆第2回策定委員会でみなさまから頂戴した質問・意見を下記のとおりまとめました。

【質問】

○教員の配置数はどのように決まるのか？

→県配置の教員については、子どもの数によって決定された学級数に基づき、人数が決まります。不足の場合には、講師の配置をお願いしています。その他、特別教育支援員等町独自で採用している職員もいます。

○教育目標について、どのように振り返りを行い改善しているのか？

→年度末にCS委員会で検証し、次年度に向けた議論をしています。

○国見町にも不登校・不登校傾向の子どもがいるのか？

→国見町でも例外ではなく、不登校・不登校傾向の子どもはいます。

○「くにみ学園」の建設予定地はどこか？

→今は「くにみ学園」に必要な機能について検討しているところです。最終的にこんな機能を持った「くにみ学園」にしたいということが決まってから、それに合う土地はどこにあるのか、最適なところを見つけていきたいと考えています。

【意見】

□教員数を確保しようとする、予算の面が厳しくなり新しい事業に取り組めなくなるケースもあるが、東京都の和田中学校のように、授業以外のことは地域の方をお願いして、地域に開いた学校として成功している事例があるので参考にしたい。

□第6章子ども観について、具体目標がたくさんありすぎるため、何か尖った「これ」という一言で現わせるようにすると良いと感じる。

□「国見を愛する」という郷土愛については、具体目標ではなく、いろんな教育をした結果、国見町を想いつながり続ける気持ちが醸成されたということの方が良いと思う。

□「くにみ学園」を折角作るのであれば、「今やっている学校の当たり前」ときちんと向き合い、体育祭や文化祭などをもっと面白く学び深いものにしてほしい。

□最近の子どもたちはしっかり題材を与えてあげないとなかなか物事を考えない印象があるため、基本計画の具体目標から派生した授業を行い、子どもたちに考えさせるのも一つの方法であると感じる。

□学園構想を考えるときに子どもたちの発想や意見がまだ入ってきていないと感じるため、幼小中それぞれの段階に応じて具体的に考えてもらうことも必要ではないか。「子どもたちのやりたいことをサポートしていく姿勢」が大事。

□具体目標を実現するためには、各成長段階に応じてきちんと目標を立てて下ろしていき、みんなで勉強し合って振り返ってまた進んでいくという形が理想。

□今の教育現場は非常に多忙であり、どうしても「教員中心」となってしまう。教員が教科の指導に特化することができればゆとりが生まれ、「子ども中心」に学習を組み立てていけると感じるため、「くにみ学園」としてそこを目指していくことが大事。

□教員のなり手がいない現状であり、「くにみ学園」の理念を実現するためにも、先生方も大事にされ、学びのあるような環境であることが重要。

□子どもたちを育てるうえで、外との関係を持ちながら育てていくことが必要であると思う。目指す子どもの姿として「他者との協働」が入るのではないか？

□「郷土愛をはぐくむ」について、関わる人によって町に興味をもったり、人とのつながりがあるからこそ国見に戻ってくるということがあるため、「国見に生きる人たち」との関わりがとても大事になる。

□一貫したカリキュラムについては、生活科や総合での取り組みがつなぎやすいと感じる。

□「子育て力の低下」という現状・課題が示されているが、「子育ての仕方が変化している」という表現が適当である。